

2021年 戦争体験を語り継ぐ集い

＜第28集＞戦時体験記録集

二度と戦争を繰り返さないため

大切な人の命を守るため

戦争中に 何が起こっていたのかを 知ってください



戦争になると 人が人ではなくなります 命が命ではなくなります

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

名古屋市緑生涯学習センター主催の事業で、進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当しています。行政と市民が協働した取り組みを続けています。2021年は新型コロナウイルス感染予防対策をしながら2年ぶりの開催になりました。

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦争が始まった時の現実はどうだったのか、戦時下での暮らし、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの毎日を過ごさなくてはならない、厳しい現実になることを、伝えています。戦争の悲惨さを伝えることで、平和と平和を守る大切さを、考えていただける機会にさせていただくことを願っております。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

◇戦時体験記録集について

2年という時を経て、体験された方の高齢化が急速に進んでいく現実を実感しています。記録集へ投稿いただける方も、語り部としてお話しいただける方も、年々少なくなります。今回はボリュームの少ない記録集になりましたが、詰め込まれた思いは今まで以上に熱いものがあります。変わらぬ平和への願いを込めて作成いたしました。二度と悲惨な戦争を繰り返さないために、体験された方の思いが少しでも届きますように。興味関心を持っていただける方へ、その周りの方へとお届けできたら嬉しく思います。この冊子を手にとってくださる皆様から、平和への祈りが広がりますように。

◇紙芝居について

有松あない人の会に掲載の許可をいただき、今回の語り部さんとの協力によりこの記録集に収めさせていただきました。ありがとうございました。

◇ピースあいちについて

「戦争と平和の資料館ピースあいち」資料館を運営するボランティア団体です。戦争を忘れないように資料を集め、記憶をつなぎ、教訓を学び、二度と再び戦争をしないように平和のために行動するきっかけとなるように願って、さまざまな活動をされています。

今年も「戦争のない平和な世界を！」との熱い思いと、賛同していただいた皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会 一同

◆目 次◆

＊語り部タイム＊

在満少国民の戦中・戦後体験

ピースあいち語り手の会 会員（松下哲子） - - - - - P1

有松俘虜収容所紙芝居について（福岡友一） - - - - - P5

有松俘虜収容所の話を伝えていく（上田英二） - - - - - P6

紙芝居＊有松俘虜収容所の話

【戦争の時代＊お灸と指輪】 - - - - - P7

＊戦時体験者への思い＊

風化させないために

小さなことでも 聞こう 伝えよう（佐野環） - - - - - P15

欧州の見聞きした戦争体験

～私が住んでみて～（山口道子） - - - - - P16

2021 年＊語り部タイム＊

在満少国民の戦中・戦後体験

ピースあいち語り手の会 会員 松下 哲子

・昭和9年（1934）

満州国遼寧省本溪湖市生まれ。父は満鉄勤務、4歳頃から同省奉天氏市（現中国遼寧省の省都瀋陽市市）に移り、昭和21年一敗戦の翌年一8月、引き揚げまでを過ごす。

・昭和16年

奉天市高千穂在満国民学校に入学。校門の脇に奉安電殿があり、校庭の一隅には「高千穂神社」と呼ぶ小さな神社があって、入学式の時には玉串を奉献した。（後記校歌参照）

・同年12月8日

「大東亜戦争」開戦。戦時下にあっても子どもの生活には大きな変化なし。

・昭和19年

戦況悪化につれて、内地に帰還する級友が増え、教室内が閑散とし始める。

授業のない日が多くなり、郊外に出てヒマの種子をまいた一絞った油を飛行機の燃料にすることであった。冬になると、暖房が入らなくなり、学校生活は厳しいものとなった。

・昭和20年（1945）8月初め

父から突然、これから疎開することになったと告げられ、慌しく手回り品をまとめて奉天駅に向かう。疎開できるのは母と私と四歳の弟だけ、父と当時20歳過ぎていた姉は疎開が許されなかった。満鉄の他の家族と共に、長時間列車に揺られて降りたところは平壤（ピョンヤン）で、大同湖畔の旅館に収容された。

・昭和20年8月15日

「玉音放送」を聴く。敗戦国民となり、旅館を追われて学校の体育館に移る。

・同年8月末

貨物列車に乗って奉天に帰る。ソ連兵が溢れる中で恐怖の日々が始

まる。

秋ごろからぼろぼろの服に真っ黒な顔、やせこけた日本人の避難民が目につくようになる。主に北満の開拓地から長い逃避行を重ねてきた人々であったと聞く。多くの人々が飢え、寒さ、伝染病等で命を落とした。これらの人々はまともに葬られることもなかったそうである。

・昭和 21 年

ソ連兵は去り、続いて国府軍（蒋介石の国民党軍）が来て去り、街は八路軍（毛沢東の人民解放軍）の支配下に入る。

・同年 8 月初め

慌しく引き揚げの準備開始。貨物列車を乗り継ぎ、3 週間近くかかって引き揚げ基地の葫蘆島に着く。アメリカの上陸用舟艇を運ぶ船で、船酔いに苦しみながら 8 月末に佐世保に上陸。8 月 31 日の夜、父の郷里熊本市の南部内田村にたどり着く。弟も私も栄養失調状態であった。

【参考資料】

1) 満州国国歌

おおみひかり天地に満ち
帝徳は高く尊し
豊栄の万寿ことほぎ
天つみわざ仰ぎまつらん

2) 高千穂在満国民学校校歌

松みどりなる高千穂の
宮居に清き真心を
捧げまつりて大君の
聖諭のこたへまつらなむ

2
番
省
略

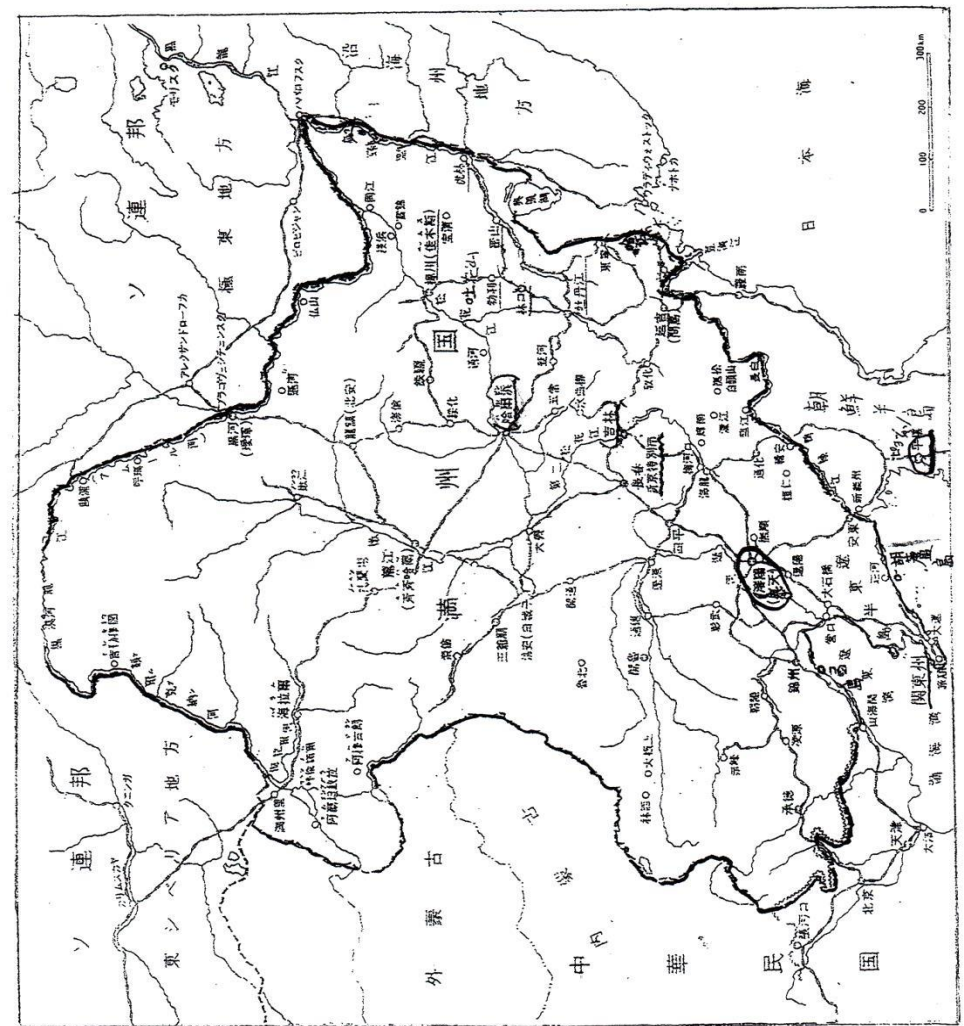
花咲く庭も勇士の
いさおし高く薫るなり
心を鍛へ身を鍛へ
国を守らむああ我ら

当時の教育指針の根拠

植田謙吉関東軍司令官は 1936 年（昭和 11 年）9 月に、「満州の根本理念と協会の本質」という一文を日本人向けに発表した。そこには大和民族は優秀だから他民族を指導し、「その足らざるを補い、努めざるを鞭打ち、まつろわざるをまつろわせ」て「道義世界」を完成させる「天与の使命を有す」と露骨に述べている。「まつろう」は服従する、従う、の意味で、服従しない者は鞭で叩いてでも服従させよ、と言っているものである。植田の一文はこれまで行ってきた統治の仕方方を再確認したに過ぎず、格別目新しいものではなかった。

「満州帝国」 太平洋戦争研究会編著

河出文庫 河出書房新社 2006 年刊



参考資料

旧満州国地図

満州国＝現中国東北三省
()内は省都
黒龍江省(ハルビン)哈爾濱
吉林省(吉林)
遼寧省(奉天)
(現 沈陽)瀋陽
満州国の首都は新京
(現 長春)

(別紙-1)

当表は『満洲開拓史』（満洲開拓史刊行会刊）に記載のものを整理した『長野県満洲開拓史（総論編）』（長野県開拓自興会刊）に記載（309頁）のものも再整理して作成した。開拓団員数については当時の混乱、統計の取り方等により数値に開差があるが、当表についても一応の目安として頂きたい。なお、後に全国開拓自興会（解散）では暫定的な満蒙開拓団員総数について約27万人としている。

5

福岡 友一

以前、町の会報の挿絵として有松俘虜収容所の絵画を依頼され、救援物資投下の絵を当時思い出し描きました。5年程過ぎて 2010 年5月28 日に収容所に近い東丘コミセンで、天野鎮雄（俳優）さんの収容所公演会（朗読劇）が開かれました。その時、関係写真の展示に私の出した挿絵と酷似の写真がありました。関係者からまるでこの写真を見て絵を描いたように似ていると言われ、この際、収容所の紙芝居を作る様に頼まれました。

これが収容所の紙芝居を描く根本です。

戦争末期に近い頃、雑木林のうっそうとした南向きの丘に、宅地造成が始まり住民の関心が集まりました。大空襲の始まる少し前のことです。

しばらくしてスレート葺のペニヤ建ての粗末な建物が六棟程完成しました。すぐに大柄な初めて見る外国人が、黄茶色の古びた兵隊着で300名ほどが有松駅近くに集まりました。敵国の捕虜でした。それから毎朝、名鉄電車に積み込まれ熱田まで通勤が始まりました。(熱田には日本車両の軍需工場があった)

有松俘虜収容所の話を伝えていく

上田 英二

数年ほど前、緑区平和美術展で有松にあった名古屋俘虜収容所の写真・資料など見て驚いたことがありました。まさかこんな近い所に戦争中、捕虜収容所があったなんて思いもよらぬ事でした。

戦後 76 年も経って、戦争中のことなんか、誰も口に出すことはありません。どこにも戦争中の遺跡や遺物など綺麗さっぱりと無くなっていました。

今は北朝鮮がミサイルを日本海に度々発射してアメリカを恫喝し、日本は対抗手段としてイージス艦船やイージスシステム基地の建設などに躍起になっています。対中国政策でもそうです。沖縄南方の尖閣諸島問題でも領有権を争って自衛隊を使って防衛強化に余念がありません。下手をすれば何かの拍子に小さな小競り合いから戦争を誘発してしまう恐れがあります。

20 世紀になってから、世界は二度の大戦を起こしてしまいました。そのおかげで日本は多大な犠牲を払ってきました。自分の両親や祖父母の世代が経験した悲惨な生活や人生を思うと、人間というのはちっとも賢くならないのだと情けなく思ってしまいます。

そんな時、この捕虜収容所の話とそれを紙芝居として描かれた福岡友一さんの努力を無駄にしてはいけません。人間は嫌なことは、忘れたいと思うけれど、忘れてはいけないことも大切なことです。愚直だと言われても戦争で亡くなった人の事、二度と戦争は起こさないと誓った日本国憲法を守らなくてはなりません。

だから、この有松捕虜収容所の話と紙芝居を大切に語り継いでいきたいと思うのです

紙しばい 有松俘虜収容所の話

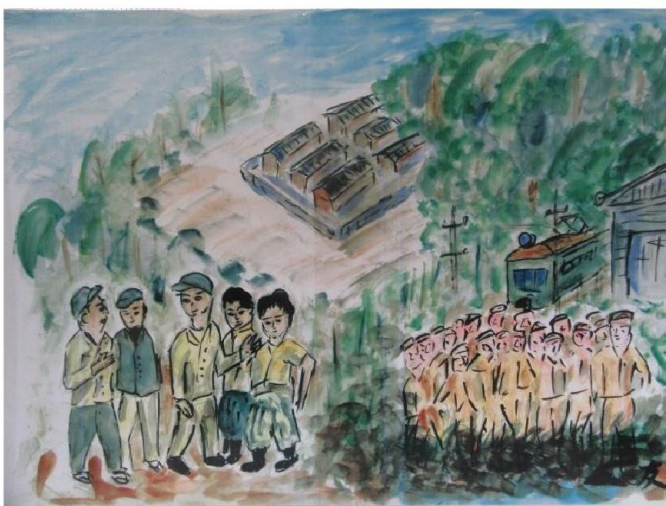
【戦争の時代＊お灸と指輪】

福岡友一 上田英二

「お灸と指輪」制作 有松あない人の会
文 浅野康子 絵 福岡友一 12 枚 上映時間 15 分



① 「皆さんは日本が昭和16年20年にかけて太平洋戦争をしていたことを知っていますか。これはその時代に、有松の町のお医者さんだった棚橋龍三先生が体験されたことを紙芝居にしたものです。不幸なせんそうの時代のなかで、一つの「心に残るとてもうれしいお話」です。



②昭和16年12月に始まった太平洋戦争はだんだんとみんなの生活を苦しくしていきました。絞りが作れなくなつた有松の町の人達は軍需工場へ駆り出されていきました。

子どもたちも防空頭巾をかぶって登校、学校では竹やり訓練がありました。空襲警報のさいれんが鳴ると授業は中止、急いで家に帰ったのです。

そんな大変な時代でしたが、子供たちは池で泳いだり野原を駆け回って遊んでいました。

高台にある小学校の運動場からは見晴らしがよく、名鉄電車を挟んで向こうに小高い丘が見えていました。ずっと雑木林になっていてパラパラと人家が見えるくらい、有松は緑の多い静かな町でした。

③少し前からその林が削られて運動場のような広場になったのです。何だろうと思っていると平屋建ての建物が六つも出来て町の大人たちの話題になっていく。

「あそこの丘の上に敵国で捕まえた捕虜たちがぐるらしいぞ」。「捕虜たちがそんなに来て町はどうなるんだ」「用心が悪くなるぞ」。まだ見たこともない敵国の捕虜がこの町に来ること町の人たちは大騒ぎ。敵国の捕虜が来るのです。

まったく今まで考えもしなかったことが起きるのではないかと心配しながらも、みんなは黙っていた。昭和18年の暮れから、朝夕の有松駅に大柄な捕虜たちを見かけるようになった。



④町の人達は大人も子供も何となく不安で、遠くからそっと見ているという雰囲気だった。ある日の夕食の時、父が「お父さんは明日からあそこにいる捕虜たちの診察をすることになったよ」といった。突然のことで母や私も妹もびっくりした。

私の父は、その頃、町でただ一人のお医者さんでした。父は捕虜のアメリカ人軍医と二人で300人程の兵士を診る事になったのです。町医者として診察しながらも、父はあまり収容所のことは話題にすることなく忙しくしていました。父の齢を超えた今、私はあれこれと記憶を思い起こしています。



⑤当時、丘の上の収容所には300名ほどの捕虜が生活し、そこから名鉄電車にぎゅうぎゅう詰めになされて熱田の軍需工場へ働きに行っていたのです。朝になると、駅の北の丘を下り一列に並んで重い足取りで改札に向かう光景が見られました。

大きな体の捕虜たちが監視され、体をこん棒でたたかれながら労働に行ったのです。仲間に担がれて帰ってきた人もいたそうです。

それを見ていた人は「敵国の捕虜と言えどもとても可哀そうだった」と。

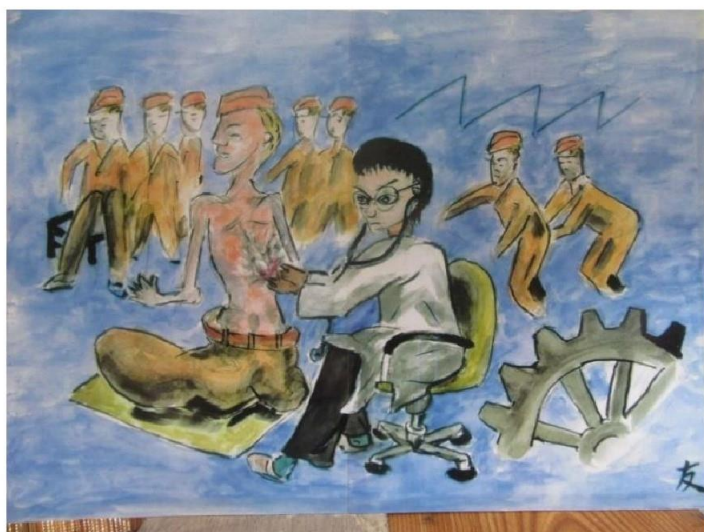
捕虜の待遇は厳しく栄養失調、かっけ、腰痛、黄疸などに苦しみながら働いていたそうです。



⑥有松の町の人達の生活も大変でした。全国に有名な有松絞も布がなくては作れません。「贅沢は敵」だったので売れません。今は盛大に行われるお祭りも山車の出番はなく、狸々と天狗がみんなを追いかけるだけでした。

それでも子供たちにはとてもうれしい一日でした。お米も配給となり、食事は大根、さつまいもが多く、いつもお腹をすかしている状態でした。ましてや敵国の捕虜に与える薬も食料もありません。

それでも捕虜たちは、休日には収容所の敷地内の畑を耕したり、時々周辺の家から卵を分けてもらっていたらしい。当時は有松でも二ワトリを飼っている家が多かったようです。



⑦厳しい状況の中で働く捕虜たちの体調は、日に日に悪くなりました。敵国の捕虜といえども何とかならないか。あれこれ考えた父は思い切って病気で苦しむ捕虜にお灸をやってみることにしました。

薬がない中では、お灸が唯一の選択だったことでした。

お灸は、日本では大昔から行われていた治療方法でしたが、西洋の捕虜にはビックリすることでした。なにしろ皮膚の上にモグサをのせてそれに火をつけるのですから。彼らは、お灸は虐待だ」と思ったのです。それでも父は捕虜の苦しみを少しでも和らげるにはお灸しかないと考えたのでした。

⑧ 捕虜収容所の医師として働いていて約20か月経った昭和20年8月、広島と長崎に原子爆弾が落とされて戦争は終わりました。日本は戦争に負けたのです。

連日連夜おびえていた爆撃機の音はピタリと止み、丘の上の捕虜たちに飛行機からたくさんのお救援物資が落とされるようになりました。食料などが入ったドラム缶に付けた赤や青のパラシュートがまるで花が咲いたように鮮やかだったと思います。

収容所の近くに落ちた物を、大人も子供も拾いに行きました。もう戦争は終わったのです。敵も味方ありません。しばらくして捕虜たちの帰国が始まりました。



⑨ 9月の暑い日のことでした。収容所で一緒に仕事をしていたアメリカ人の軍医さんが父のところへ帰国の挨拶に来ました。戸口から背中をかがめて又ーと入ってきて、軍医は自分がかめていたルビーの指輪を外して父に渡しました。

捕虜である彼がお礼の品として渡せるものは、肌身離さず付けていた指輪しか無かった事でしょう。父は大切にしていたトラの絵の掛け軸を渡し言葉交わして、そのアメリカ人軍医は帰っていきました。

当時、小学4年の私は、その様子を戸の隙間からじっと見ていました。一瞬の、とても不思議な出来事でした。





⑩戦後の町の人達の暮らしはまだまだ大変でしたが、少しずつもとに戻り始めていました。父も町のお医者さんとして忙しい日を送っていました。戦争が終わった次の年の2月、父に一通の手紙が届きました。横浜の裁判所からの呼び出しでした。戦争を裁く「極東軍事裁判」が始まったのです。収容所で行ったお灸の治療が「虐待であった」というものでした。世界で取り決めた捕虜を守るためのハーグ条約・ジュネーブ条約に違反していると判断されたのです。

父が横浜の裁判所へ行ってしまった家の中は、シーンとして暗く沈んでいました。母に「どうしてお父さんはかえってこないの?」とは、とても言い出せなかったのです。



⑪母も私たちも黙ってただ父の帰りを待っていました。ところが、とてもうれしいことになったのです。収容所で一緒に働いたアメリカ人軍医が「お灸は虐待ではありません。東洋医学の正しい治療方法です」と証言してくれました。

彼の証言のお陰で父は罪に問われることなく無罪となったのです。アメリカ人軍医と父の間には一緒に仕事をしていた中で、強い信頼関係が生まれていたのだと思います。



⑫その後、父はこの話にはあまり触れることなく、朝から晩まで医者として一生懸命働き、79歳の人生を終えました。私も誰にも話さないで時々そのルビーの指輪を引き出しから取り出して眺めたり、はめたりしていました。でも齢を重ねた今は、この事実を次の世代の人に語り継いでおくべきだと思うようになったのです。

鬼畜米英と教え込まれて、捕虜を敵視するかたくなな心の人が多かった時代でした。国を超え弱った人に手を差し伸べた棚橋先生、そしてその先生を裁判から救ったアメリカ人軍医。

どんな時でも「信頼と友情」大切にしたいものですね。

(おしまい)

2020年秋、戦争体験を語り継ぐ集いの会合があり、会員の福岡友一さんが描画製作された有松俘虜収容所のお話「お灸と指輪」を実演されました。福岡さんは年金者組合員で左京山に古くからの住まいです。年金者ニュースでも以前から紹介している有松俘虜収容所のお話を描き製作されたものです。(文責：上田英二)

戦時体験者への思い

風化させないために

小さなことでも 聞こう 伝えよう

佐 野 環

----- 私 の 場 合 -----

表題を掲げて原稿用紙に向かったものの、全く筆が進まないまま数日。亡父から生前一度も戦争体験を聞く機会が無かった自分の迂闊さを悔いている。こんな私の書く拙文でも「語り継ぐ」行為の一部として受容して頂けるなら・・・と、気持ちを奮い立たせてペンを執る。

1946年12月生まれの私の名前は「環」。

さて、どう読んで（呼んで）下さるだろうか？

おそらく、たちまち正答して頂けるころは無いだろう。大抵は「タマキ」と・・・その昔、三浦環というソプラノ歌手がオペラ「蝶々夫人」で一世を風靡したと、学校で習ったことがある。「おんなじ」「私もタマキよ」とその名にあやかりたい気持ちで溢れた・・・が。

私は「メグル」と言う。父の命名で生まれる前から、男であれ女であれ、第一子に万感を込め、夢を託して名付けられた。が、残念なことに、人生の大半、正しく読まれたことはなく「名前コンプレックス」を抱いたまま生きてきた。

が、この10年程、名前の由来を自ら語ることで「良い名前ね」と言われるようになり、自信が生まれてきた。

父は国家公務員として、まだ新婚の夫婦でひっそりと海を渡り、任地のハルビンに向かった。（うかつにも何年何月の出来事なのか、調べないと分からない）そして、父は現地招集で兵役に。母は「里帰り」のつもりで、手荷物一つで富山の婚家へ帰った。（そのまま、戦況悪化で満州へは戻れず）

戦地で父は何を体験したのか？たまたに夜中に大きな叫び声を上げて、うなされることがあった。あとから聞いても、夢の中身は一切語らない。私が高校生位の頃、一度だけ聞き出した夢の中身・・・薪を組んで、複数の死体を焼いていたところ、突然、炎の中にヌッと立ち上がる亡骸が

あり、とても怖い思いをしたと。父は片脚のスネに被弾した傷があり、寒い季節には疼きを訴えたこともあったが、詳しくは語らなかった。一体どんな体験をしたのだろうか？63年の生涯、ずうっと口を閉ざしていた。

そんな父の命名の思い・・・「環」の元の字は「還」。つまり、満州から無事に「帰還」できた証としての申し子につけたい一字だったのだ。

そして、あえて「（二度と戦争に巻き込まれず）人生に良い事がめぐってくるように」と願いを込めて「メグル」と読ませた。「大きな辞書には載っている。正しい読み方だ」と胸を張っていた。

日本国憲法公布直後に生まれた私は、戦争放棄、平和主義をうたった「同じ歳」の憲法を守り、絶対に変えさせないことを誓って生きたいと思う。

欧州の見聞きした戦争体験

～私が住んでみて～

山口 道子

今から約20年前、ちょうど欧州がユーロ貨幣に統一される前後に欧州のベルギー王国に駐在員の妻として住んでいた。

ベルギー王国は1839年に独立し国家となった。独立するまで、国民は朝掲げられる旗を見て、今日はどこの国民なのだ、今日はどこの国民なのだと思って生活をしていたと現地の方に聞いた。

ベルギーは、西ヨーロッパに位置する連邦立憲君主制国家。隣国のオランダ、ルクセンブルクと合わせてベネルクスと呼ばれる。憲法上の首都は、19の基礎自治体からなるブリュッセル首都圏の自治体のひとつ、ブリュッセル市である。

国の大きさは日本の九州ぐらいであり、国民数は首都ブリュッセル（夫の会社はフラマン語圏にあった為、私達は通常ブラッセルと言っていた）約122万人、全国でも約1150万人を切るぐらいである。が、ブラッセルにかぎって言えばこの数は現地人数で約4割、私たちのような外国人が6割であると言われていた。首都ブリュッセル（ブリュッセル）

ル首都圏地域）は欧州連合（EU）の主要機関の多くが置かれているため「EU の首都」とも言われており、その通信・金融網はヨーロッパを越えて地球規模である。

19 世紀にネーデルラント連合王国から独立した国家で、オランダ語の一種であるフラマン語が公用語の北部フランデレン地域と、フランス語が公用語の南部ワロン地域とにほぼ二分される（このほかにドイツ語が公用語のドイツ語共同体地域もある）。建国以来、単一国家であったが、オランダ語系住民とフランス語系住民の対立（言語戦争）が続いたため、1993 年にフランデレン地域とワロン地域とブリュッセル首都圏の区分を主とする連邦制に移行した。

1960 年代に入ると、ワロン地域の経済低迷とフランデレン地域の経済成長によって両地域の経済的地位が逆転し、これに伴って言語問題が激化していった。これを解決するためにベルギー政府は分権化を進め、1963 年には言語境界線が確定され、1970 年には 3 つの言語共同体と 3 つの地域が成立し、1980 年には言語共同体とブリュッセルを除く 2 つの地域に政府が設置され、1988 年にはブリュッセル地域政府を設置した上で 1993 年には正式に連邦国家へと移行した。

国内の表示は。例えば

日付	表 記				備考
1 月 1 日	日本語	オランダ語	フランス語	ドイツ語	
	正月	nl:Nieuwjaar	fr:Nouvel An	de:Neujahr	

とあらわされ、地下鉄の駅名も当然オランダ語表記とフランス語表記が並列で書かれていた。文字の読めない移民も多くいたため、各駅には絵が絵描かれていて、（同じ絵は二つとなく）それでもわかるようになっていた。

又、スーパーのチラシ、及び官公庁からの配布物も右から読み出すとフランス語表記、真ん中まで来ると、くるとひっくり返して左側からフラマン語表記となっていて、各人が理解の出来る表記で物事を理解するようになっていた。

夫の会社では約 20 か国の人々が働いており、言語の公平をきすために、クイーンズイングリッシュ（アメリカ英語ではない）が使用され、夫からは現地人の気分を損ねないためにも、私がフランス語を習っているとは決して言わないようにとくぎをさされた。私たち家族は地下鉄の

駅に近く現地人のリタイヤーしたちょっと裕福な人達が住むアパートメントのペントハウス（日本でいうマンションだがあちらでは、自己所有物はマンション、賃貸物件はアパートと呼んでいた）に住んでいた。

赴任当時、ボスの妻は車を所有しない（以前英国で駐在員の妻が交通事故を起こし収監され夫の赴任が終わっても一緒に帰国できなかったとかで）と言われていたので、私がどこへでも行けるようにと地下鉄の駅に近くに住まいを決めてくれたのは、夫のせめてもの心遣いであったのだろう。（がしかし、私が言い伝えを破り車を所有し運転してしまい、その後はボスの妻でも運転できるようになった）

現地の人々は住まいを状況に合わせて何回も変える。各駅近くには動ける高齢者用のアパートが多くありとても好都合にできていた。因みに税金はとてつもなく高いが、年金が充分で老後の預金をしなくてもよければそれも一考に値する。

現地人のペレーゲさんの地下室にある収納庫の中を見せて戴いたとき私はびっくりした。我が家のガラクタが入れてある収納庫に比べ、なんとなんと食料品がびっしりと隙間なく詰まっていた。

いつ何時、戦争になっても困らないようにとね！と言われ、平和ボケしている日本人の私は非常に驚いたことを記憶している。

ベルギーにはアウシュビッツの収容所も残っており、日本人学校の生徒も見学に行くと聞き、私も何人かの方をお連れした。一度入り口を入ると一方通行でしか出口に到達しない。段々無口になって足取りも重くなる。アンネフランクの日記で読んではいしたが、戦後生まれの私には想像を絶する凄惨な場所であった。

戦争というものに対して、島国の日本と異なり、大陸続きの小国の置かれている立場（国に力がないので EU 本部が置かれたとも聞いた）を肌で感じ、世界の中の自国（日本）の置かれている立場を改めて認識させられた。

帰国した時から橋詰さんに肌で感じてきた欧州の戦争体験について話をするようにと言われ約束したが、1 年延ばしにして約束を守らないうちに記憶は薄れ、橋詰さんは旅立たれてしまわれた。きっと天国から約束は早く果たしなさいとメッセージを送り続けていられたのであろう。ごめんなさい。

編集後記

2021年も新型コロナウイルスが毎日のようにニュースとして流れています。ワクチンの接種も始まりましたが、きつい副反応が出てしまわれた方もあります。相変わらずマスクと自粛の生活に、日常が緊張状態ですね。コロナの騒ぎが始まってから、世界が二極化していく様をずっと見ているように感じます。

先日ネットニュースでこんな記事を目にしました。【職場や大学で横行する「ワクチンハラスメント」過剰な同調圧力社会の悲惨な末路】自由に選択できる社会がUターンしたみたいで、みんながするから、私もする、みんながやるから、あなたも当然やらなきゃいけないでしょ、という自分のことを他者が決めるような感覚に陥ります。戦時中の社会感覚を再現しているような・・・自粛が他粛になってませんか？と問うています。多様な選択肢に OK を出せるかどうか、社会のキャパが狭くなっている感じです。

この記事の最後は「同調圧力が強い社会は変化への対応力が弱い」と綴られ、「何よりも私たち自身が、一方で同調圧力にうんざりしながら、他方で周囲に圧力をかけたり、その恩恵にあずかったりしている矛盾に気づかなければ何も変わらない」と締めくくられています。

秀でた研究者はその時代「変人」と呼ばれ、後に「偉人」となっています。同じを大切にしたいと思いやりと、豊かな創造力を伸ばしていく世界が未来でありますようにと祈ります。温もりと余裕が感じられる未来の社会に希望を持ち、平和はつながりから生まれることを意識して生きたいですね。この戦時体験記録集が、平和と絆を育む一助となれば幸いに存じます。



＜第28集＞戦時体験記録集

令和3年7月22日発行 戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています